生家への愛とコミュニズム思想の共存

―弘前高等学校時代の太宰治―

A sense of identification with Tsushima family and communism
About Osamu Dazai in Hirosaki senior high school

高橋宏宣
福島工業高等専門学校一般教科
Hironobu Takahashi
Fukushima National College of Technology, Department of General Education

（2014年9月17日受理）

Osamu Dazai wrote “Aware-ga” “Kotetsu-showa” and “Jinushi-ichidai” when he was a student of Hirosaki senior high school. In this article I analyze these early works and confirm that a sense of identification with Tsushima family in which he was born and communism are described consistently. Dazai expressed a sense of belonging to Tsushima family in “Aware-ga”, and showed his sympathy for communism in “Kotetsu-showa”. He attempted to write the birth of a large-scale landowner who empathized with communism, but he failed.

Key words:　Osamu Dazai, Hirosaki senior high school, Tsushima family, communism

「津軽の殿様」と呼ばれた津島家に生まれ、兄弟中でも際立って成績の良かった太宰治が、その境遇を享受しつつ、弘前高等学校在学時にコミュニズム思想に共鳴し、あたかも地主の階級悪を告発するかのような習作を発表したのはなぜだろうか。太宰が弘前高校に在籍していた昭和初年代、旧制高校の学生の多くが左傾化していたが、太宰の左傾化はどのような特徴を有するのだろうか。本稿は、太宰の弘前高校在籍時の習作の中から「哀蚊」「虎徹宵話」「地主一代」を取り上げ、弘前高校時代の太宰においては生家津島家への愛」と、コミュニズム思想への共感が矛盾することなく共存し、生家への愛とコミュニズム思想への共感を、太宰自身が意識的に統合しようとしていた痕跡がみられることについて、「地主一代」の連載中断を手がかりに論ずるものである。

青森中学以前の太宰治の習作について、安藤宏氏は、強い「自尊心」とその対照をなす「淋しさ」との間を往還する振幅に特徴があったとし、少年太宰の自尊心が肉親への敗北をバネに常に生家への帰属意識へと回帰していったことを指摘している[2]。この安藤論に依拠しつつ、稿者（高橋）は、青森中学時代の習作の分析を通じ、そこに、何ごとも差配できる全能性への憧れと、敗北しても最終的に勝者になることを目論む価値転倒的操作の萌芽が認められることを指摘し、中学時代の習作の主人公は、強くあること、勝つことだけでなく、負けないことを目指し、そのための方法が模索されていたことを論じた[3]。

この全能性への憧れは、弘前高校時代の習作の主人公に於いても継続していると考える。本稿は、青森中学時代から続く太宰の全能性への憧憬が、どのようなバリエーションを被りながら継承されているかについても論じる予定である。

1　生家への帰属意識―「哀蚊」―

弘前高校入学後、太宰の生活は順調であった。しかし、昭和二年七月二十四日未明の芥川龍之介の自殺の報に接し、太宰は激しく動揺する。芥川に憧れを抱き、漠然とながら作家を目指していた太宰にとって、芥川の死がいかに衝撃的であったかは想像に難くない。芥川の死後、太宰は突然義太夫の稽古を始め、花柳界へ出入りするようになり、近松門左衛門や泉鏡花の文学世界に耽溺し、学業を放棄し始める。

青森中学四年の二月以来途絶えていた習作の発表が再開されたのは、弘前高校二年（昭和三年）五月の「無間奈落・序編父の妾宅」（『細胞文芸』創刊号、昭和三・五）からである。「無間奈落」は「異様に発達して居た自尊心」を持った大村寛治を主人公とし、次作の「股をくゞる」（『細胞文芸』3号、昭和三・七）では「偉大なる自尊心」を有して「出世」と「復讐」を期す韓信が描かれる。「彼等と其のいとしき母」（『細胞文芸』4号、昭和三・九）では、母と兄の中挟みになって憂鬱をかこつ弟が描かれ、この時期の習作では、「自尊心」を有する主人公の心の屈折が描かれている。

次に、弘前高校三年（昭和四年）の習作を時系列で追跡してみよう。

「哀蚊」は『弘高新聞』6号（昭和四・五）に掲載され[4]、一部改変されたものが「地主一代」の第一回連載（『座標』創刊号、昭和五・一）、「葉」（『鵠』昭和九・四）の中に引用されていくことになる。大森郁之助氏は、初出「哀蚊」が「地主一代」の作中作に引用される過程で削除された部分に着目し、初出「哀蚊」に階級批判が込められていたと指摘する[5]。東郷克美氏は、理念的には拒否すべき封建的な家に属する「罪意識」と、家が醸し出す「世界」に包まれる快楽が混じり合う官能性が作品の底にあるとする[6]。安藤宏氏は、太宰治におけるマルキシズムの階級的な相克意識と血縁共同体への回帰の希求とが別のものではなかったことが、「婆様のぬくもり」という肉親の記憶への回帰として宿命づけられていたと指摘する[7]。こうした先行論を踏まえると、「哀蚊」読解の鍵は、封建制や階級制を体現する「婆様」に幼い「私」が抱かれるというモチーフの意味するものに尽きると思われる。

「おかしな幽霊」を見た「思ひ出」話として語り出された「哀蚊」で話柄の中心となっているのは、「私」が「婆様」に大切にされた事実とその詳細である。「婆様」は「私」の生家が「百万の身代」を築くにあたって欠かせなかった人らしいのであり、表向きは「隠居」しているものの、生家の差配に強大な権限を有

している。「私」の父も姉の結婚相手も、家存続のために「養子」として外部から呼ばれた人であり、迎える側の「婆様」の権限が如何に強いかは容易に想像できよう。

さて、題名になっている「哀蚊」とは、「婆様」が自身をたとえて言ったものだった。

『秋まで生き残されてる蚊を哀蚊と言ふのぢや。蚊燻しは焚かぬもの。不憫の故にな』

ああ、一言一句そのまんま私は記憶して居りまする。婆様は寝ながら滅入るやうな口調でそう語られ……そう、そう婆様は私を抱いてお寝になられる時は、きまつて私の両足を婆様の太股の間に挟んで温めて下さつたものでございます。或寒い晩なぞ、婆様は私の寝巻を皆お剥ぎとりになつてお了ひになり、真裸に致しまして婆様御自身も輝く程お綺麗な素肌をおむき出し下さつて、私を抱いてお寝になり、お温めなされて呉れた事もございました。それ程婆様は私を大切にして居らつしやつたのでございます。

『なんの、哀蚊はわしぢやがな。はかない……』（傍線部引用者・以下同）

「秋まで生き残されてる蚊」とは、活動の最盛期である夏の間に繁殖を終えて死ねなかった蚊で、いずれ遠からず死ぬ「はかない」存在である。「婆様」は自身を「哀蚊」になぞらえて、老い先の短さを嘆いてみせる。しかし実際は、「たわむれ」ながらも「私」を「吉三」と呼んで恋慕にこがれる「八百屋於七」を気取ってみたり、引用部のように、「寒い晩」に裸になり、「私」も裸にして抱いて温めたりもする。「私」の記憶の中の「婆様」は、エロス的要素を多分に有する存在なのであった。

そのような「婆様」を「私」は「幼い時から」「大好き」で、「婆様」も「私を大切にして居らつしやつた」のだと「私」は回想する。だが、傍点が施されてある通り、この「大切」には何かが含意されている。

「姉様」が養子を迎えた祝言の晩、姉夫婦の寝室を覗く「幽霊」を「私」は目撃している。「私」の見た「幽霊」は「婆様」に違いあるまい。「婆様」の言うところに拠れば、この「家」の「百万の身代」は、「婆様」の婚姻を犠牲にして築かれたのであった。「縁遠くて一生鉄漿をお附けせずにお暮しなさつた」「婆様」に欠けていて、姉夫婦の寝室にあつたものとは何か。それは、性的な充足である。「婆様」は姉夫婦の寝室を覗くことによつて、決して満たされることのなかつた愉悦を代替的に得ようとしている。そして、「婆様」の性的な欠損を代替的に満たしていたのが、ほかならぬ幼年時代の「私」なのであつた。「私」は「婆様」に欠落するものを充填できる位置を占めることにより、婆様になくてはならない存在となつていたわけである。

幼年時代の「私」と「婆様」との関係を、「八百屋於七」や裸で温め合うエロス的交感に基づいていたかのように語つた理由もここにある。幼年時の自分を「婆様」になくてはならない存在として回想することにより、現在の「私」は「婆様」の差配する「百万の身代」の「家」への強烈な帰属意識を得ている。その意識の源泉である「婆様」の不行跡を暴き立てるようなことを「私」がするはずがない。だから、「婆様」は「幽霊」とされたのであり、「婆様」が「私」を「大切」にしていたと語られていることと、姉夫婦の寝室を「幽霊」が覗いていたということは、同じことの表と裏なのである。

「百万の身代」を築いた「婆様」の性的欲望が、老いてなお枯れることなく、旺盛であるかのように描かれていることは興味深い。性的欲望は、一時的には満たされても完全に満たされることはない。だから、それは埋めようがない。従つて、欲望の対象はひたすら求められ続ける。「婆様」に欠落していたがゆえに、求められ続ける位置に幼年時代の「私」がいた――これが普通でない大切のされ方として、傍点が施された理由である。

フロイトによれば、自己感情には三つの根があるという。一次的なナルシシズム、すなわち自己の過大評価と、万能への志向、他者からの承認である[8]。「百万の身代」を有する家に帰属し、そこの象徴的存在に愛されるという筋立ては、短い中にフロイトのいう自己感情の根をいずれも含んでいる。「哀蚊」は、これ以前の習作に見られる生硬な語りと異なり、居住まいを正したかのような落ち着いた語りである。「哀蚊」

の語りの成功は、語る主体の位置取り、つまり、自らを繋留しておく全能的なセキュア・ベースを確保し、それとの関係を軸に物語を起動することにより可能になったと思われる。

2　コミュニズム思想の全能性への共感―「虎徹宵話」―

昭和四年の秋以降、太宰の習作は急速に左傾化の傾向を深めていく。青森県下の統一文芸雑誌『座標』に「地主一代」を発表するのもこの後である。「哀歌」で生家への帰属意識が頂点を迎えたのと入れ替わるように、「虎徹宵話」「花火」「地主一代」と、直接間接にコミュニズムへの共感が語られていく。こうした左傾化の動きは、太宰の精神のどのような様相を表しているのであろうか[9]。本節では「虎徹宵話」の改稿をとば口として、太宰の精神の変遷を推測してみたい。

「虎徹宵話」ははじめ『猟騎兵』6号（昭和四・七）に発表され、改稿を経たものが弘前高等学校『校友会雑誌』15号（昭和四・一二）に再掲された。初稿は昭和四年三月十日の脱稿、改稿は同年十月十八日の脱稿と推定され[10]、七ヶ月を経た改稿の痕跡は、この間の太宰の内面の軌跡を追跡するのに好適である。

「虎徹宵話」は、「新選組といふ馬の骨」を自称する「男」が、向島の茶屋で女を相手にこれまでの行跡を述懐し、旧体制の崩壊と新時代の到来を予告するという趣になっている。初稿では、「坂本」とその「同志」たちが自分たちの信じる「主義」に絶対の自信を持っていたことについて語られる一方、自分の属する陣営が相手の「主義に必ず反対するという主義」でしか主体性を保持できない悔しさが自嘲ぎみに表白されているだけであった。

「会津公の御命令…それもある。だが今でこそ言ふが、会津公がなんだ。時勢と全然かけ離れた、独りよがりの…まあ言ふまい。（中略）坂本が、殺されても笑つて居たそうではないか。…池田屋でやられた奴等の同志も皆死ぬ時は嬉しかつたらう。…畜生つ！　所が俺達には主義がないのだ。いやたゞ一つある。奴等の主義に必ず反対するといふ主義だ。ふふん、妙な主義だ」（初稿）

同じ部分は、改稿後次のように変更され、「男」の視角が大きく変わっている。

『会津公の御命令…それもある。だが今でこそ言ふが、会津公がなんだ。いかにも新選組は会津公のお蔭であゝして遊んで居てめしが食くたのだらう。併し、それだからと言ふて、あんなに旨従する必要はなかつたのだ。そうだ、会津公はなんだ。あいつ等の世の中は一昔前には確かにあつた、だが今ぢや！　今ぢや会津公にあるものはたゞあのお城一つだ。そして今に会津公はあのお城を枕の哀れな討死をするに定つて居るのだ！』

―と、とんでもない。お前は気でも狂うたか。事もあらうに会津の殿様の悪口…

おせいは、身も魂も仰天した。きよときよと四辺を見廻したのは、立ち聞きして居る人も無いかと確かめる可憐な心構へであつた。

『お前、あの、もちつと低く言はれないかい…』

おどおどしながら、兎に角懸命にたしなめた。男はそれも上の空、漸く興奮しかけて来た両目をきよろり動かしたゞけで、

『あいつ等は時の流れといふものを知らない。嘗つては俺もそれを知らなかつた。だが俺は多くの事実を見た、しかも正しい眼でだ！　そして、そして知つたのだ、つまり昨日の善は今日の悪であり得るといふ事をだ。だから世の中も其れに従つて土台から建て直さなければウソだ。いゝか、おい、今に見ろ、あいつ等の夢想だもしなかつた素晴しいどんでん返しがあいつ等の悠々閑々たる足下から、むつくり起るぞ！』

改稿で「男」は「正しい眼」を獲得している。「正しい眼」で「多くの事実」を検証し、「時の流れといふもの」すなわち時代の変化に気づいた「男」は、「善」や「悪」が容易に価値転換する相対的なものであるとの認識に至っている。その結果、「土台から建て直さ」れた「世の中」の建設が必要であると確信し、その実現のための「素晴しいどんでん返し」（革命）の到来を夢見る。「嘗つては」「知らなかつた」ものを「男」に認識させた「正しい眼」とは何か。それは新たな知にほかならない。この知が、「男」に現実を俯瞰的に見通すことを教え、今まで気づかなかつた問題に気づかせた。

川崎和啓氏は「虎徹宵話」「花火」の表現を踏まえ、当時の太宰に「コミュニズム思想への共感と共産主義革命到来の確信」があつたとする[1]。コミュニズム思想の受容が太宰に「正しい眼」の獲得を加筆せしめたことは疑問の余地がないだろう。「男」の主張は、新たな知の獲得によつて現実の「正しい」見方が可能となつて為された。その知がマルクスに発するコミュニズム思想の影響下にあることは、社会変革の必要性の自覚と革命への期待から、高い確度で推察しうる。弘前高校時代の左翼思想の摂取については推測の域を出ない部分もあるが、太宰が文献を通じて熱心に左翼思想を学んでいたことは間違いない[2]。「虎徹宵話」改稿の痕跡は、コミュニズム思想の影響を受けた社会変革の熱望の波に太宰もまた身を投じていたことを跡づけるものとみなしてよい。

「虎徹宵話」の改稿からわかるのは、太宰にとつてコミュニズム思想とは、「嘗つては」「知らなかつた」「時の流れといふもの」を知ることを可能にし、その上で、いま目の前にある「事実」を検証する「正しい眼」を授けてくれるもの、すなわち、混沌とした不可視の現実の中にあつて、明瞭で正確な見通しを授け、「正しい」判断へと導いてくれる外部の知であつたということである。コミュニズム思想受容の初期において太宰を強く引きつけたのは、コミュニズム思想のそうした全能的な知的側面であつたと思われる。

再び初出と、傍線部が加筆された改稿を比較してみよう。

〈初稿〉「みちめなものだ。新選組が何処に行つても人気のないのは当り前の事さ。えらい奴は皆どしどし新選組から脱けて行く。…残つて居る奴はどれもこれも仕様のない阿呆。…時勢だな…俺にして見た所で、いつかはこれはこういふ事に成る…とは思ふて居た。が、こんなに早く、かう迄急にこう成らうとは…不思議…といふより恐ろしい。…」

〈改稿〉『俺達は今に身動きが出来なくなるだらう。どんでん返しには妥協がない。俺達が殺されるか、奴等同志が殺されるかだ。殺されるのは無論俺達さ。きまつて居る。…みちめなものだ。新選組が何処に行つても人気のないのは当り前の事さ。えらい奴は皆どしどし新選組から脱けて行く。…残つて居る奴はどれもこれも仕様のない阿呆。…時勢だな…俺にして見た所で、時の流れといふものは、こんなに早く流れて居るとは思ひも及ばなかつた。今更この流れが恐ろしい。…』

対立する二極（「俺達」と「奴等同志」）があつて、来るべき革命（「どんでん返し」）により、一方（「奴等同志」）が全面的に勝利し、他方（「俺達」）は滅亡する。「どんでん返しには妥協がな」く、革命が達成された後には滅亡側のよき部分が一部なりとも継承されない。論理的に瑕疵のない行動の選択によつて闘争に全面勝利を収める――これはまさにコミュニズム思想の花形である。初稿から改稿にいたる七ヶ月の間に、コミュニズムが太宰の思考を深耕していつた経過が以上の検討を通して確認できる。

「虎徹宵話」は、当時の太宰がコミュニズムの精華として見出した思想の全能性への共感を率直に表現したものと見なしてよい。青森中学時代の習作の特徴の一つであつた全能であることへの憧憬は、コミュニズム思想の受容を通し、全能感を与えてくれる知への信頼と性質を変えつつ、弘前高校時代も存続していたと考えられるのである。

3　「地主一代」のアクロバシー

しかし、これまでの議論から当然の帰結として疑問が生じる。「哀蚊」で幻想的装いの中に韜晦して表白した生家くの愛と資本家階級の廃絶を目指すコミュニズム思想くの共感は、矛盾しないのかと。さもなくば、相剋しあう問題を統合するような論理のアクロバシーなど、果たして可能なのかと。「地主一代」は『座標』に三回に渡って連載（昭和五・一、昭和五・三、昭和五・五）された後中絶して未完に終わり、この中絶の背景には、長兄文治による圧力があったとも言われている。本稿では、「地主一代」が生家くの愛とコミュニズム思想くの共感という矛盾に太宰が解答を与えようとした試みであったとの立場から、連載中絶の意味するところについて考えてみたい。

高橋秀太郎氏は、「地主一代」の先行論で人物造形の「分裂」が問題になってきたことについて言及している[13]。氏の指摘する人物造形の「分裂」がやはりこの習作のキーポイントになると思われる。

「地主一代」の人物造形の「分裂」を階層化してみると、①語り手である「私」が自身に感じる「分裂」、②作者の人物造形の際に付与された「分裂」、③構成上のある種の破綻にともなって生じた人物造形の「分裂」、が考えられる。本稿は③の可能性について検討してみたいと思う。

「地主一代」の「私」は「放蕩」によって「性病」に罹患し、それを看護婦の「瀬川」に感染させて死に至らしめる好色で野蛮な獣性の持ち主である。「地主一代」は、この「私」の横暴な振る舞いや傲慢な口振りを通して、地主の階級悪を浮き彫りにする意図を持っているように見える。そして、「マルクス主義とやらにかぶれて居る」「弟」と地主の「兄」という設定は、太宰と兄文治との関係を連想させる。しかし、文治は「放蕩」とは無縁の謹厳実直の人で、金木町長時代には、大地主の若い当主とは思えないほど腰が低く、気さくにだれにでも話しかけ、役場の書記の入営壮行会で自ら腕をふるってカレーライスを作るような親しみやすい人であった。その後、文治は昭和二年九月の県議会議員選挙でトップ当選し、弱冠三十歳ながら議会で華々しく演説し、「新しいゼントルマン」「貴公子」との評を新聞紙上で得る津島家の誇りでもあった。文治は、対外的には謙虚かつ誠実で前途有望な若き政治家であり、津島家内ではいささか融通の利かない堅苦しい真面目な家長だったのである[14]。自惚れが強く、傲慢で高飛車な「地主一代」の「兄」が、太宰の兄文治と似ても似つかぬ男であることは、以上の事実から明白である。また、作中の小作争議のモデルは、西津軽郡の車力村小作争議とも、秋田県北秋田郡の阿仁前田の小作争議とも言われている。これらのことは、「地主一代」が生家津島家から遠心的に地主階級の問題を取り扱うために構想されたことを窺わせるものである。

「地主一代」は「大地主」である「私」が「小作争議の真相」を明らかにする目的で記した「手記」の体裁をとっている。その内容は、「五年前からの小作料の値上げ」と「養魚池埋立事件」を発端とする小作争議の勃発、及び、その後の農民大会に至るまでの経過を軸に展開している。「私」は農民の愚かさや無能ぶりを繰り返し罵り、その野卑な振る舞いをいやしめる。こうした態度は、確かに「大地主」の傲慢を印象づける。

一方で、「私」は自身が「いゝ男」で「負けることを知らぬ」「強い男」であることも強調する。「哀蚊」が作中作として引用されたのも文才を誇るためであった。美男で屈強で文才があり、なおかつ経営の才覚も持ち合わせているとは、なんと過分な天恵に浴している男であろうか。「地主一代」が「大地主」の専横を告発する目的で書かれたにしては、「私」の全能感が際立ちすぎている。

次に引用するのは「第二章　奈落」の最終部分で、この部分をもって「地主一代」は中絶する。

『では、失礼します。お互ひに闘ひませう。地主が強いか、小作人が勝つか、此の歴史的に記念すべき大決戦が、ここ数日で定るのです。必死になって闘って見ませう』

『言ふ迄も無い事だ。俺は覚悟をして居る。俺は俺の全財産を投げうって迄も此の争議には勝たねばならないのだ。俺は新興の力を挫く為に生まれて来たのだ。それが俺の天命なのだ。近頃やっとそれが判って来たやうな気がする。此の天命に甘んじて、一生憎まれ役をつとめて居るのこそ、何よりも英雄的な華々しい人間らしい生き方だと思ふのだ。此の苦しい悲壮な任務に踏みとゞまり得ず、他の

仕事にコソコソ逃げて行くお前達こそ本当の卑怯者なのだ。まあ、とにかく命を賭けて闘つて見やう。戦ひが済んだら又ゆつくり会はう』

私は弟の笑ひながら恥かしそうに差しのべた大きい右手を堅く握つた。もう夜があけた。牛乳のやうな白い朝霧が、地下室の階段からトロトロと流れ込んで来た。明り窓からは、柔かい日光がふんわりと。――日本晴れのいい天気だつた。

そして私は生れて初めて肉親の愛を掌の中にぬくぬくと感じて居た。

「弟」は「小作人」支援の側に廻り、穏やかな口調で「兄」の打倒を宣告している。それに対し「私」は、「新興の力を挫く為に生まれて来た」自らの「天命」に従い、「此の争議には勝たねばならないのだ」と応え、「弟」の差し延べた手を「堅く」握り返す。この時、「私」は「生まれて初めて肉親の愛を掌の中にぬくぬくと感じて居た」とされている。

しかし、「私」と「弟」の関係を辿り返してみると、二人は「小さい時から仲が悪かつた」のであり、容貌や学校での成績をはじめ「マルクス主義とやらにかぶれて居る」「馬鹿」な「弟」に対する絶対の優越が、「私」の自尊心を支えてもいたのだつた。断絶といつていいほどの隔たりがこの兄弟の関係を特徴づけていたにもかかわらず、最終部分で「肉親の愛を掌の中にぬくぬくと感じ」るという筋の展開は、「ぬくぬくと」、すなわち、ずうずうしく、ふてぶてしいものであつたとしても、かなり唐突の感がある。

また、「歴史的に記念すべき大決戦」を「必死になつて闘つて見ませう」という「弟」に対し、「私」は「まあ、とにかく命を賭けて闘つて見やう」（傍点・高橋）と幾分受け流しているようにも見える。「命を賭けて闘」い、「戦ひが済んだら又ゆつくり会」うというのは、随分奇妙な話である。自らの生存が相手の死を意味するような戦いの後、相手と再会することを予め欲するというのは矛盾している。全能感に満ちた「私」があえて矛盾したことを口にするというのは、そもそも「命を賭け」るような闘争をする意志がないことの現れである。

「又ゆつくり会はう」という「私」の呼びかけに「弟」は右手を差し延べて応じ、二人は堅く手を握り合う。「戦ひが済んだら又ゆつくり会はう」という呼びかけが、兄弟間にこれまでの断絶を一気に埋めるかの如きコミュニケーションを成立させ、「第二章　奈落」は幕を閉じる。「弟」との対決を直前に控えながら、「肉親の愛」を感じる「私」の発話や語りは、今後二人が融和の方向へ向かう展開を予感させる。

「第二章　奈落」の最終部分は、自らの全能を過信し、新興の力を挫くことを「天命」と考える兄と、その限界を見極めて「マルクス主義」に基づいて新たな方向性を切り開こうとする弟が、互いの信条を賭けて戦つた後に和解を果たす展開への道筋を準備している。そして、二人の和解の意味するところは、「マルクス主義」に理解のある大地主の誕生である。しかし、「マルクス主義」に理解のある大地主の誕生という総花的な結末は、そもそも「マルクス主義」の論理に照らせば矛盾している。この論理のアクロバシーを続く連載に於いて成功させる力が当時の太宰にはなく、それゆえ「地主一代」は書き続けられることがなかつたのだと考えられる。

生家津島家から遠心的に大地主の可能性について書くことにより、生家への愛とコミュニズム思想への共感を両立させ、両者を接続する試みは成功しなかつた。これは書かれざる部分への推測であり、検証不能であることを十分承知しつつも、この書かれざる部分に弘前高校時代の太宰の精神構造を解く鍵があるように思えてならない。

4　まとめ

相馬正一氏は、太宰がコミュニズム思想を信奉してはいなかつたと論じている[15]。この相馬論を起点に、東郷克美氏は、「太宰がついに真の意味でのコミュニストでなかつたということと、コミュニズムとの出会いが彼の文学精神に決定的な影響をもたらしたという考え方とは矛盾しない」とし、コミュニズムとの接触が太宰の文学形成において重要であつたとしている[16]。安藤宏氏も、「実際の活動面における非主体性

と、〈自尊心〉に与えた内的な衝撃とはここで明確に区別されなければならない」と述べ、コミュニズムが対他的倫理としてではなく自らの帰属関係の中で問われ、そこに自らを自閉していくきっかけとなったことを指摘している[17]。

川崎和啓氏は、「左傾思想の持ち主でありながら、同時に、「ブルジョア文学」の血が沁みこんだプチブル的感性の持ち主であること、この点にこそ太宰治のコミュニズム受容の第一の特異性があった」とする[18]。相馬、東郷、安藤各氏の論を踏まえて結論づけられた川崎氏の指摘は、習作時代の太宰とコミュニズムとの関わりについて見事に総括しており、本稿は川崎論の範疇を超え出るものではない。しかしながら、稿者のこれまでの論旨をそこに付け加えるとすれば、次のようになる。

生家津島家への太宰の強い帰属意識―愛―は、「哀蚊」でいう「百万の身代」、すなわち、地域において圧倒的な政治・経済の優位性を保持する家の一員であるという誇りに源を持ち、太宰自身もまた、青森中学時代から全能への志向や憧憬が強かった。弘前高校入学以後出会ったコミュニズム思想は、不可視で混沌とした現実を「正しい眼」で見ることを可能にする、太宰にとってみれば全能的な知であり、そのイデオロギー性よりも、思想の全能性に惹かれたのだった。だから、太宰にとって、生家への愛とコミュニズム思想への共感は、全能性への志向という点で無矛盾なのであり、この二つは接続されるべきものとして太宰に認識されていた。

この問題の延長戦上には、全能性への志向や憧憬が、全能でないことを核とする後の太宰文学にどう接続するのかという問題があるわけだが、それは今後の検討課題として別稿を期したい。

注

1 「帰属意識」よりも、より強い対象との結びつきの感情を強調する目的で「愛」の語を用いている。
2 「太宰治・その文学の成立」（『国語と国文学』昭和六一・一二）。
3 高橋宏宣「太宰治・初期習作の再検討―全能への志向・価値転倒的操作・否定の機序の観点から―」（福島工業高等専門学校『研究紀要』53、平成二四・一二）
4 「哀蚊」末尾には「四、四、二十五」の表記があり、脱稿年月日を示すと思われるが、山内祥史氏は「哀蚊」が昭和二年の一月頃に書かれていた可能性を指摘している（「哀蚊」『群像日本の作家17　太宰治』小学館、平成三・一）。
5 「花火」と「哀蚊」の間―太宰治の初期習作群におけるこむみゅにずむの位相―」（『國學院雑誌』66、昭和四四〇・五）
6 「逆行と変身―太宰治『晩年』への一視点」（『成城大学短期大学部紀要』4、昭和四八・一）
7 「「哀蚊」の系譜　習作時代の太宰治」（『太宰治』4、昭和六三・七）
8 S・フロイト「ナルシシズムの導入に向けて」（『フロイト全集13』岩波書店、平成二二・三）
9 川崎和啓「太宰治におけるコミュニズムと転向」（『兵庫教育大学近代文学雑誌』平成二・一）は、宮本顕治「敗北の文学」の影響を挙げている。
10 初稿の本文末尾には「（四、三、十）」、改稿の末尾には「四・三・十（初稿）／四・十・十八」とある。
11 注9に同じ。
12 「虎徹宵話」が書かれてから少し後の昭和五年当時、太宰が左翼思想にどのように関わっていたかについて山内祥史氏が調査し、「文部省学生部が蒐集した秘資料類によれば、「昭和五年一月四（ママ）年当時」の津島逸朗は、「叔父である弘前高等学校生徒津島修治より社会科学の講義を受け、マルクス・レーニン主義に興味を有するに至つた」（『秘思想調査資料第十七輯』文部省学生部、昭和8年1月）とあり、また、「四（ママ）年生当時叔父たる高校生津島修二（ママ）なるものより左翼出版物を貸与せられ傍らそと関連し毎週社会革命の必然性につき説明を受けつゝありし処次第に之に興味を感ずるに至」（『秘学生思想事件一覧第二輯』文部省学生部、昭和7年8月）つた、とある」（「昭和五年」『太宰治の年譜』大修館書店、平成二四・一二）と指摘している。
13 「いいか、私はこんな男なのだ―「地主一代」の語り―」（『太宰治研究10』平成一四・六、和泉書院）
14 秋山耿太郎・福島義雄『津島家の人びと』（ちくま学芸文庫、平成一一・一）97～103頁に拠る。
15 「太宰治とコミュニズム」（奥野健男編『太宰治研究』筑摩書房、昭和四三・四）
16 注6に同じ。
17 注2に同じ。
18 注9論文に同じ。

※太宰治の作品は『太宰治全集１』（筑摩書房、平成一一・一一）に拠り、旧字体は新字体に改めた。なお、本稿は、平成二十六年七月五日に行われた平成二十六年度日本近代文学会東北支部夏季大会（弘前大学）における研究発表「生家への愛とマルキシズム思想の共存―弘前高等学校時代の太宰治―」に基づき、成稿したものである。